

---

# The Nerdre

伊東歩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Nerdre

### 【NZコード】

N8570L

### 【作者名】

伊東歩

### 【あらすじ】

冴えない高校生の堀頂太。そんな自分を変えるため、同じく冴えない友人二人と学園祭のバンドコンテストに参加することを決意する。

## 『第24回 私立穂智高等学校学園祭』

堀頂太はじつと目をつぶっていた。緊張で手足がちぎれそうだ。そんな表現ないか。いや、今の僕なら本当に起こりかねない。それくらい体中の血液がハイスピードで流れている。いかん、視界がぼやけてきた。そうだ、こんな時は何か違う事を考えて気を紛らわせばいいのだ。ええと、円周率は、 $3 \cdot 1415926 \cdots$ 。

「やべえよ、チョウちゃん。俺吐きそつ。」

松高篤弘の顔面は今にも死にそうなほど真っ白になってしまっている。

「思い出さずなっつー！何か違う事考えればいいんだって。ほら、久栄を見てみろよ。黙つてじつとしてる。實に落ち着いたもんだろ。」

「頂太は必死に声の震えを抑えていた。香川久栄は壁に背を付けじつと俯いている。

「まじかよ。久栄すげえな。」

篤弘が近寄る。久栄をまじまじと見つめ、頂太に向き直る。

「氣絶してるんですけど。」

「うおーい、まじかい！ひさえーー！」

久栄はその体勢のままゆっくりと倒れていった。慌てて抱きかかる篤弘。そんな様子を見ながら頂太は半ば後悔していた。  
(何でこんな事になっちゃったんだろ?)

さかのぼること約3ヶ月前。私立穂智高校2年C組の教室。休み時間だというのに頂太はいつものように参考書とにらめっこをしていた。別に勉強をしているわけではない。休み時間だからといって

する事がないのだ。暇を持て余すのもなんとなくかっこ悪いと思い、仕方なく参考書を開いているという次第だ。つまるところ、頂太には友人がほんдинない。はつきり言つてしまふと、学校の外で同級生と喋つた事などないと言つていいほどだった。クラスメイトはみな何やら流行りのファッショングや音楽、エンタメ情報を披露し合つてゐる。頂太にはどれも入り込めない内容ばかりだ。頂太が話せる内容といつたら参考書の事くらいだつた。一人でいる時間が長いせいで高校に入つて既に15冊の参考書を読破していた。皮肉なことにそのお陰で頂太は学年でもトップクラスに入るほどの成績を修めていた。そんな頂太のあだ名はもちろん「ガリ勉君」だ。内気な性格は表面上にも現れるようで、暗く節目がちな表情と、目元を隠してしまつほどの長い前髪。眼鏡はやや太目の黒ぶちだ。これで友人などそう出来るはずもない。頂太の席のすぐ隣で騒いでいた数人の男子グループの一人が机にぶつかつた。思わず参考書を落とす。頂太はちらつとそちらを見たが、相手は何事もなかつたかのように笑つてゐる。ため息をひとつ。もちろん誰にも聞こえないようだ。参考書を拾おうと手を伸ばす。しかし、寸でのところで誰かの手に先を越された。白く細い、綺麗な腕だ。

「はい、堀君。」

顔を上げる。クラスメイトの迫柚那だ。一瞬にして全身が熱くなる。

「あ、ありがと。」

参考書を受け取りすぐさまそちらに目を落とす。緊張して柚那をまともに見れない。少ししてちらつと田だけで確認する。そこにはもう柚那の姿はなかつた。ほつとしたような、ちよつと残念なような。頂太はそつと参考書を撫で、微かに口元を緩ませた。

（他人が見たら気持ち悪がられるかもな。）

そんな事を考えながらも、気持ちはつきつきとしていた。

「いらっしゃいやせー。なんだ、お前か。」

「なんだつて何だよ。お帰りくらいと言え。」

「お前こそただいまくらいい言えねえのか。」

「よう、武やんのせがれ。相変わらずしけた面してんない。」

「おっちゃんは相変わらず性格も頭も明るいな。」

「こりゃ一本取られた。がははは。」

「あつはつはつは。」

大笑いする中年一人。

(くだらぬー。)

頂太の実家は曾お祖父さんの代から続く小さな電気屋だった。と言つても電化製品を売る事よりも修理や運搬を主とした、いかにも商店街の便利屋的存在だった。いつもどおり客は向かいの内藤酒店の店主、内藤忠則一人だった。正確には客ではない。何を買うでも修理の依頼をするでもなく、日がな一日頂太の父、武史と世間話をしているだけだ。店の奥にある玄関を上がり、自分の部屋に向かう台所からいい匂いがしている。意思に反し自然と足がそつちに向く。

「あらお帰り、頂太。」

母、郁恵が皿に大盛りの唐揚げを乗せていた。それを一つつまみ、再び自分の部屋に向かつた。部屋に入り机に向かう。と言つても無論勉強などしない。勉強は好きではなかつた。だが学校で半強制的に勉強をしている。家に帰つてまでする必要など一つもない。マンガ本を手にとる。頂太の唯一の趣味だ。種類に関係なくマンガは好きだ。元々の記憶力に加え、何度も何度も繰り返し読むのでほとんど内容を覚えてしまつていて。しかしそれでも読むと面白い。もしかしたらこれがオタクの始まりなんだろうか、時々そんな事を考えてしまう。だから頂太は漫画の事を他人には話さない。誰も頂太がマンガ好きだという事すら知らないのだ。「ROCK」というマンガ本を開く。一瞬にしてその世界に吸い込まれていった。主人公の女の子がプロのミュージシャンを目指す話だ。最近実写版で映画化されたらしいが、頂太にはまったく興味ない話だ。やはりマンガでなければ、映画化されてようやく盛り上がる人間たちがいるがそれ

は何のことではない、流行に流されているだけだ。自分みたいにマンガを先に知つていないと。ついつい頭の中で一人演説をしてしまった。

（そりや 友達もできないはずだよな。）

「ずいぶん暗い人間だ。時々自分が情けなくなる。まあいいか。本に集中しよう。

穂智高校では年一回、学生集会という全校生徒が体育館に集まって行われる会報が開かれる。今日がその日だ。生徒会長がマイクを手に慣れた調子で進行をしている。

「では、次の議題に移りたいと思います。えー次は、第24回私立穂智高等学校学園祭についてです。何か意見のあるクラスの代表者は挙手をお願いします。」

すつと9本の手が挙がる。一学年3クラスなのでつまり全クラスの代表者が手を挙げた事になる。

「では、3年B組。」

一人の女子生徒が立ち上がる。担当者がマイクを手に走った。「えっと。うちのクラスでは、例年通りの出店や催し物に加え、ミスコンなど観客の方が参加できるイベントをやってはどうかという意見が出ました。」

おおつ、周囲からどよめきが起つる。もちろん大半が男子生徒の声だ。

「なるほど、検討してみましょ。他に意見のあるクラスは挙手をお願いします。」

生徒会長の軽快な声が響いていた。

「学生集会終了後、いつになくみな騒いでいた。

「ミスコンいいよなあ。」

「やっぱ水着かな？」

「そりやそうしょ。見逃せねえな。」

わいわいがやがや。やはり男子生徒達の話題の中心はその話に刃

きるようだ。そんなクラスメイトを尻目に頂太は今日も参考書を開いていた。  
(ミスコンか。迫さん出るかな?出るよな、やつぱ。なんたつてこの学校のアイドルだもんな。でもほんと水着かな?皆の目に晒されるのはちょっとやだな。)

ぼんやりとそんな事を考えていた。不意に教室のドアが開かれる。

担任の教師が入ってきた。

「みんな席着けー。授業はじめるぞ。」

一人の男子生徒が手を挙げた。

「先生。学園祭の件どうなったんすか?ミスコンは?」

ざわざわとしていた教室が一気に静かになった。

(鶴の一聲。ちょっと違うか。)

頂太一人だけが違う事を考えている。

「さあな、まだ決まってない。まあ、あつたとしてもお前らが想像しているような水着でのコンテストとかじゃない事は確かだ。残念だつたな。」

男子生徒からは落胆の、女子生徒からは安堵の声がもれた。おそらく男子生徒の中で安堵の表情を浮かべたのは頂太だけだっただろう。

「そんなことよりまず心配すべきことがあるだろ。そり、これだ!」

教師が勢いよく一枚のプリントを掲げる。クラス全員が一斉にう

めき声を上げた。それはテスト用紙だった。

「いよいよ来週だな。まだ出来上がっていないんだけど、とりあえずこれはテスト対策用だ。」

そう言つてプリントを配り始めた。

「へ口むわー。」

「まじブルー。」

口々に愚痴をこぼすクラスメイトをよそに頂太は内心ほくそ笑んでいた。勉強にはそれなりの自信がある。自分をアピールするチャンスなのだ。誰に?もちろん我が穂智高のアイドル、迫柚那にだ。

頂太は来週が待ち遠しかった。しかしそう彼は知らない。学歴がものをいう時代においても、それがもつとも表に出る学生にとつては学歴などさほど重要視されていないことに。

とあるゲームセンター。今ではすっかりその存在を忘れ去られがちなゲーム、『ビート＆リズム』。これは音楽に合わせてそれに対応した十数個のボタンを押していく、いわゆる音ゲーだ。高松篤弘はまるで獲物を狩る野獣の如き鋭い眼で画面を睨んでいた。音楽が始まると、今まで微動だにしなかつた体が急に覚醒したかのように素早くしなやかに動き始めた。恐るべきスピードと的確さでボタンを押していく。その速さはと言えば残像が見えるほどだ。これを見かけた人間は足を止めずにはいられない。3分ほどで音楽は終わった。

「ふう。」

ため息を一つ。やり遂げた感に満ち満ちていた。友人の田島健吾がしきりに眼鏡を上げながら笑っている。

「いやー、いつ見てもあつんの手さばきは見事ですなあ。」

「ちょっとミスったかな。ほらランキンング3位だし。あ、評価『天才』だ。駄目だなあ。」

と言いつつも顔は満足そうだ。篤弘は自他共に認めるかなりのゲームだった。ゲームセンターはもちろん家庭用のゲームもほぼすべてのゲーム機を有するほどだ。

「あ、そろそろ帰んなきや。行こうぜ田島つち。」

ゲームセンターを出ると、入り口で運悪くぱつたりと横山信一ら数人の男子グループに出くわしてしまった。同じ高校の同級生だ。よく篤弘にちょっとかいを出してくる。

「お、高松じやねえか。いいところで会つたな。」

「やにやとしている。言わんとしている事は大体分かる。」

「ちょっと金貸してくんねえ？ 今月マジ厳しいんだよ。」

(じゃあゲーセンなんて来るなよ。)

そう思いつつも手はおもむろにズボンのポケットに伸びていた。

「僕もさつき使っちゃって、もつ無いんだよね。」

「じゃあ見せてみるよ。」

「え？ あ、いや、その。」

篤弘のうろたえた様子を見て信一らが大爆笑した。

「ジョークだよジョーク。俺がカツアゲなんてみみっちい事するわけねえだろ。しかもお前によ。やるならもうと金持ってるやつにするよ。行こうぜ。」

そう言って笑いながら去っていった。

「大丈夫？ あつん。あいつちょっと顔が良くてモテるからついに気になつてんだよ。」

健吾の言つていることは的外れであったが篤弘は何も言えなかつた。彼らが去つていった後を睨み付ける事しかできなかつた。

あつという間の一週間。今日は先週行われた中間試験の結果が発表される日だ。いつもより少しだけ早く学校に着いた。穂智高では試験結果は各教室の壁に張り出される。つまりクラス全員の成績が分かるようになっているのだ。2年生になって始めての試験。1年生の時は柚那とは別のクラスだったので自分の成績を知られる事がなかつた。しかし今日で彼女の僕を見る目がきっと変わるはずだ。自然と笑みがこぼれる。教室に入る。すでに何人か生徒が来ていた。みな成績順位の前でいろんな声をあげていた。落胆や安堵、喜びの言葉も聞き取れる。頂太もカバンを置きそれを覗き込んだ。思つたとおり、自分の名前はだいぶ上方だ。数えてみるとクラスで3位だつたらしい。

(もうちょっとといけたな。)

そう思いながらもう一度順位表に目を戻す。柚那は5位だ。  
(可愛くて優しい上に頭もいい。完璧じゃないか。)

そしてざつと全体に目を通して自分の席に戻った。いつものように参考書を開く。少しだけそわそわしていた。ほどなくして数人の女子グループが教室に入ってきた。その中に柚那の姿も見て取れた。ついに見るぞ。自然と鼓動は早くなる。参考書の内容などまったく頭に入つてこない。

「あー、あたし16位だ。微妙。」

「いいじゃん、20位にも入れなかつた私の立場は何よ。」

「すゞーい、柚那5位だつて。」

「まじで？やつぱ違うねえ。」

「まぐれよ、まぐれ。」

柚那ははにかんでいた。

（かわいいなあ。・・じゃなくて、さあ僕の成績を見てくれ。）

「あ、意外。見てよこれ。」

一人が指差す。上の方だ。思わずどきりとする。

「ほんと。川島君て頭いいんだ。」

なんだそれ。思わずすっこけかけた。川島陽一。たしか1位だったつけ。どうでもいいよ。もっと見てくれ。頂太が目を戻した時はすでに柚那達はそこから離れていた。どうやら頂太の事には一切触れていないようだつた。

（いやきっと皆の手前、言い出せなかつただけだ。うん、そうに違いない。）

頂太は意外とポジティブだつた。

しかしその日の放課後。頂太は何の前触れもなく真実を突きつけられることになる。

「柚ちゃん、帰ろうぜ。」

男の声だ。自分でも驚くほどの反応を見せた。今までにない速さで首をそちらに回す。目に飛び込んできたのは柚那と一人の男子生徒の仲睦まじい光景だつた。その男子生徒は背に何か背負っている。黒いバッグだ。しかしいびつな形だ。頭から腰下ほどまでと長く、先はえらく細い。いつたい何を入れているのか。一人で笑いながら

教室を出て行つた。近くにいた生徒の声が耳に入る。

「いいよなあ、横山のやつ。迫と付き合えるなんて。俺もギターはじめようかな。」

「まあお前の場合整形も必要だな。」

「うつせーよ、てめえ。」

「お、やるか。」

（じゃれ合いが始まつたがすでに頂太の耳には入つていなかつた。（なるほど、あればギター用のバッグだつたのか。・・いやいや、そんな事どうでもいいつつ。付き合つてんのか、あの二人。横山？一年の時クラス一緒にだつたけど全然頭よくないぞ。そんなのがいいのか？迫さん。頭よりギターなのか？）

足元がふらつく。頂太はまるでこの世の終わりを宣告されたような絶望を感じていた。

祖母が日本舞踊の先生をしている。その事もあっておばあちゃん子だつた香川久栄はとても礼儀正しい、真面目過ぎる少年に育つた。それゆえ同年代の人間とは話が合わず、友人ができにくいう悩みを抱えていた。出来る事なら幼年期に戻りたい。戻つて普通の少年として育ち直したい。そう思うことも少なくなかつた。決して祖母が嫌いになつたわけではないが、性格のまったく違う兄と自分を比べるとどうしても気持ちが沈んでしまう。

「久栄、悪いんだけど買い物行ってくんねえ？ギターの弦が切れちまつた。」

机に向かつている久栄に向かつて智栄が声をかけてきた。

「兄さんが自分で行けばいいじゃないか。」

「分かつてねえなあ、俺の心遣いを。お前に新しい文化を触れさせてやろううつて事でお前に頼んでんだよ。」

「意味が分からぬよ。使いつぱしりと異文化がどう繋がるのさ。」

「お前はばあちゃんとべつたりで趣味がそつちに固まつちまつてる。」

ギターのかっこよさを知つたらきっと変わるぜ。」

正直その言葉には気持ちが揺らいだ。ギターか。元々何も楽器は出来ない。これを機に始めてみるのもいいのかも知れない。

「・・・ってそんな手に乗るわけないだろう。自分で行つてよ。」「ちえつ。」

仕方なく智栄はのそのそと部屋を後にすることになった。その姿を見送りながら微かな後悔を感じていた。兄の智栄は去年高校を卒業して現在はコンビニでバイトをしている。高校時代からのバンド仲間とプロのミュージシャンを目指して日々練習に励んでいるという。自分とはまったく違う。久栄は流行りの音楽には興味がない。育った環境は兄とそう違わないはずなのだが、やはり生まれ持つたものが違うのだろうか。それともずっと祖母を見て育つたせいか。変わったいとは思う。兄のように友人を沢山持ち、ざっくばらんに生きたいとも思う。問題はきつかけと、踏み出す勇気だ。気付くと、久栄は立ち上がり兄を追つていた。

ホームルームではもつぱら来月に控えた学園祭の話で盛り上がっていた。

「じゃあうちのクラスは焼きそば屋に決定つて事でいいな。」

教師が手元のノートに決定事項を次々を記入している。一人の男子生徒が手を挙げた。

「先生。ミスコンどうなったんですか、ミスコン。」

「あ、言つて忘れてたな。実はPTAに猛反対食らっちゃつてさ。風紀を乱す、とか言つて。ミスコン＝水着つて考え方はお前らと一緒にだな。」

教室に笑いが起ころ。

「まあそういう事で、完全になくなつたわけじゃないけど、制服で、つてことで話は決まつたから。いつも見てるしそう盛り上がりはないかもな。」

「マジかよー。」

「制服なんか見飽きたつーの。」

「私服は駄目なんすか？」

男子が一斉に抗議の声を上げる。

「コンテストだからって言つて張り切つて派手にしたり露出度の高い服にするやつも出てくるかもしれんだる。だから制服限定。」「えー。」

これには男子のみならず女子の批難の声も上がった。

「文句言つたって仕方ないだろ。その代わり、もう一つコンテストをすることになった。」

その言葉にしんと静まり返る。

「な、何のコンテストですか？」

沈黙に耐え切れなくなつた生徒が声を上げる

「そのコンテストって言つのはな、バンドコンテストだ。」

その日のうちに3組がエントリーした。その中の1組のバンドのメンバーにはあの横山がいた。頂太はとぼとぼと家路に着いた。(やっぱりバンドやってるとかつこいいよなあ。所詮僕みたいなネクラは相手にされないんだ。)

「いらっしゃいやせー。何だ、お前か。」

「聞き飽きたよ、それ。」

「お、どうした? 今日は一段と元気ねえなあ、武やんのせがれよう。」

「いいかげん名前で呼んでくれ。」

「どうしたんだ頂太。ほんとに元気ねえじゃねえか。」

二人の間を通り抜ける。

「別に何もないよ。」

一人はそれ以上何も言つてはこなかつた。部屋に入り布団に倒れる。虚ろな目には全てのものがただなんとなく映つているだけだった。ただ一つを除いては。

マンガ本だ。

頂太が今一番気に入っているバンドマンのマンガ。それを手にとつてパラパラとページをめくる。

物語の主人公になりきるのは得意だ。一気にマンガの世界に入つていった。目の前には何万人もの観客。

僕は主人公だ。

どんな逆境にも負けない、どんな困難にも挫けない強い人間だ。目をつぶり本を閉じる。深呼吸を一つして目を見開く。その目はまさに主人公の女の子の目そのものだった。

自分から話し掛ける友人など限られている。頂太はメモ帳を開き、それを何度も確認しながらボタンを押した。数回の「ホール」の後に相手が出た。

「もしもし、高松ですが。」

「あ、僕篤弘君の友人の堀とります。篤弘君いますか？」

「ごめんなさい、まだ帰つてないの。多分駅前のゲームセンターかしら。」

「そうですか。じゃあ行つてみます。どうもありがとうございました。」

そのゲームセンターまでは自転車で10分とかからなかつた。目的の人間はすぐに見つかった。どうやら一人のようだ。何やらすごいスピードでボタンを叩きまくつている。素人目にはただがむしやらに叩いているようにしか見えない。だが画面を見ると、ポイントがすさまじいスピードで加算されていた。音楽が鳴り止み篤弘は動きを止めた。

「ふうう~。」

（なんかかっこいいな。）

「あつつく。すごいやなあ。」

「お、ちょうどちん。珍しいねこんな所で会うなんて。」

（そりや用がなきやまず会う事はないよ。）

頂太はまったくと言つていいほどゲームをしない。ゲームセンタ

「なんてそ、うそ立ち寄ることもない。篤弘は真剣な顔で画面に見入っていた。そして、

「うおおおおっ！行つた、1位だ。」

突然の雄たけびにびびつてしまつた。画面を見ると確かに1位の文字が。そしてその横には評価『神』となつていた。

「俺はついにやつた。神となつてしまつた。」

「ちょっと失礼。」

「いて。」

トランス状態に入りそつになつてゐる篤弘を叩き起こす。

「何？ ちゅうちん、どうしたの？」

「あつつくさあ、ドラマやらない？」

「は？」

数十分後、喫茶店でくつろぐ一人。

「何？ いきなり。」

「今度の学園祭でバンドコンテストやるつしょ。それの話。」

「あ～それ。・・つていやいや、全然分かんねえ。第一俺ドラマなんてやつたことないし。」

「あつつくなら出来る。さつきの手さばきはまさに神業だったよ。篤弘の口元が緩む。やはりうれしいらしく。」

「でも急にどうした？」

頂太は悩んだ。言つべきだらうか。柚那の事が好きで、その彼氏である横山への対抗意識から今回の決意に至つた事を。黙つていると篤弘が先に口を開いた。

「まあ言いにくいならいいけどさ。他は誰が出る？」

「えつと、岡田君のグループと佐々君のグループ。あと横山君の。」

「横山？ つて、横山信一？」

「え、うん。」

篤弘は難しい顔をして俯いた。

「どうかした？」

「そのコンテスト、勝つ見込みは？」

「その前に僕とあつつくしかいないしね。」

「だめじやん。ちゅうちんも楽器できないっしょ。無理だよ。」

篤弘が立ち上がった。頂太は何も言えずついて行くしかなかった。喫茶店を出て、急に篤弘が立ち止まつた。前方を見て固まつている。見ている先を目で追う。その先にいたのは、数人の男子グループ。その中の一人がギター・ケースを背負つているのが見て取れた。

「あ、横山君。」

横山は一人に気づき、にやりとした。こちらに近づいてくる。

「よう、また会ったな高松。今日はガリ勉君とデートか。いいな、俺は学園祭のバンドコンテストの練習で大変だよ。じゃあな。」

（性格悪！迫さんも男を見る目がないなあ。）

ぼんやりと考えていると、隣で篤弘が何か喋つているのに気が付いた。

「あの野郎。・・ちゅうちん。やつてやるよーラム。やらひぜ、バンド。」

前方を見つめる篤弘の目はいつになく力がこもつていた。

その後二人は楽器屋に足を運んだ。とりあえず楽器がないことは話にならない。とは言え何がいいのかさっぱり分からぬ。店内をうろついていた。いいかげん店員の目も気になりはじめていた。

「堀君に、高松君。」

二人は突然名前を呼ばれて驚いた。振り向くとそこには同級生の

香川久栄が立つていた。

「久栄。なんでここに？」

「兄に頼まれてね。君たちは？」

久栄は自分でも気付かぬうちに鼓動が高まつていた。もしかしたら本当に、自分を変える何かと出会えるのではないだろうか。頂太が恥ずかしそうに俯き加減で答えた。

「実は、今度の学園祭のバンドコンテストに出ようかと思つんだ。」

「え？ 本当に？」

「まあ俺たち楽器出来ないし。馬鹿な事だとは思つけどよ。」

篤弘はどことなくバツが悪そつた。そわそわとしている。

「僕も、僕も仲間に入れてくれないかな？」

頂太も篤弘も驚いた表情を見せたが、久栄が一番驚いていた。頭で考えるより先に口が動いた。

「ほんと？ いや、大歓迎だよ。」

「これで3人になつたな。でも問題は、短期間でどうマスターするかだな。」

沈黙が訪れる。だがそう長くはなかつた。おずおずと手を挙げる久栄。

「あの、上手いかどうかは分からぬけど、知り合いにバンドの人がいるよ。」

「やつは俺の弟だ。俺に似てセンスいい！」

久栄の指さばきを見ながら智栄は絶賛の声を上げていた。篤弘は智栄のバンド仲間のドラマーに指導されていく。といつよりすでに披露していた。

「皆見てくれよ、この手の動き。まじ素人とは思えねえんだけど。『音ゲー』で鍛えてますから。まだ早くできます。」

得意げに言つてのける篤弘。ドラムは何の問題もないようだつた。その隣では頂太がベースを習つていた。そちらは難有りのようだ。

「ほら、指。そういう、あ、今度は弾きが弱い。」

2時間後、ようやく初日の練習が終わつた。

「ほんと急にこんなことお願ひしちゃつてすいません。」

「いや、いいよ。教えるのも一つの練習だし。俺としては弟が普通の高校生に一步近づいてくれた感じがして嬉しい、な。」

「みんなの前でそんな事言わなくていいよ。」

「まあとにかく、あと1ヶ月ないんだろ。急がなきやな。」

「明日エントリーしてきます。」

「じゃあ、円陣でも組むか。」

智栄の提案で皆いそいそと輪を作る。

「それじゃあ、ど素人バンドの成功を祈つて、行くぞーっ！」

「おおーっ！……」

そうしてその日は別れた。頂太は帰りの道もしっかりと復習に余念がなかつた。日々根気強く参考書を読んでいたお陰で、復習や自習が癖として身に付いているのだ。

（なんとしてもマスターしてやる。）

翌日。

頂太たち3人がバンドコンテストにエントリーした事はその日の一大ニュースとなつていた。彼らの周りには今までにない人ばかりが出来ている。

「お前ら楽器出来んのかよ。」

「どんなの演奏するんだ？」

中には馬鹿にしようと近づいてくる者もいたが、今の頂太たちは何を言われても平氣だつた。ちやほやされることで完全に舞い上がつていたのだ。

「君らをあつと驚かせてやるよ。」

などと大口を叩いてしまう次第だ。

それからあつという間に10日が過ぎた。3人の演奏もだいぶさまになつてきていた。

「才能があんのかな、上達がめっちゃ早いぜ。」

それだけではない。3人とも見えない努力を重ねてきた賜物なのだ。それぞれの思いは違えども、このチームで成功したいという気持ちは変わらない。その事が彼らを突き動かしていた。

「さて、ここで相談だが、本番は何を演奏する？」

智栄が皆を集めて言つた。頂太が手を擧げる。

「あの、智さんたちのバンド、KROW KRUUEの『PHANTOM LIFE』がいいです。」

「あ、僕もそれがいいと思つてた。」

久栄も手を擧げる。篤弘も頷いていた。『PHANTOM LINE』は3人が楽器を指導してもらつ前に一度演奏してもらつた曲だ。

「いいけど、あれは未完なんだ。本当はあれ、歌詞は英語でなきゃ締まらない。でも俺ら英語苦手です。」

困った顔で俯く智栄ら。再び頂太が手を擧げた。

「あ、僕英語得意ですけど。」

ついに学園祭3日前。もはや練習など身に入らなくなつていた。ついつい無駄口が増える。

「ところで、衣装とかつてどうなんだ? 僕らつてかつこいい服持つてないだろ。」

「確かに。兄貴のを借りようか。」

「髪型もこれじゃなあ。」

「なあ、うち母親が美容院やつてるんだけど。古いけどな。「本当に? ジヤあこの際プロに頼んじゃいますか。」

「あ、あの。」

「ん? どうした、ちようちん。」

「あ、いや何でもない。」

(言い出せなかつた。親父が妙に張り切つちゃつてる事。)

数日前、父親に学園祭のことを話したときの事だ。

「何? もっと早く言えよ、そんな事は。よし、照明は任せとけ。俺は昔そういう関係の仕事もした事あるんだ。」

「そんなの無理だよ。先生たちが許すはずないだろ。」

すると武史はにやりと笑つて言つた。

「大丈夫だ。今の校長は俺の高校時代の後輩なんだ。良くしてやつた。逆らえねえよ。」

「どうした、ちようちん。トンでたぞ。」

「何でもないよ。」

3人はその日早々に切り上げることにした。当てもなく街を歩く。

「いよいよだな。」

「あつという間だった。」

「あ、あいつ。」

篤弘の顔が強張る。目線の先には、宿敵でもある横山がいた。  
「よう、おたく3人衆。出るんだってな、バンドコンテスト。悪い  
事は言わねえから辞退しろよ。恥かくだけだぜ。」  
3人は黙っていた。

「何か言えよ。」

篤弘がゆっくりと口を開いた。

「恥をかくのはそっちの方だ。」

「何だとてめえ。」

横山が篤弘に掴み掛かった。その拍子に頂太にぶつかってしまつた。バランスを崩し倒れる頂太。バキッ。

鈍い音が響く。慌てて背負っていたベースを取り出すがもう遅い。ネックのところから完全に折れてしまっていた。

「お、お前が悪いんだぞ。」

捨て台詞を残し立ち去る横山。頂太ら3人は呆然としていた。

「堀君。」

「ごめん、ちょうどん。」

「今更新しいベースは買えない。金ないし。」

まさに絶望的だった。泣き出しそうな頂太に久栄が助け舟を出す。

「そうだ、兄貴のバンド仲間に借りよう。本番当日までにはなんとかするよ。」

「頼むよ。」

本当に心からそう祈っていた。

そしてついに本番当日。3人は篤弘の母が経営している美容院に集まつた。

「堀君ごめん、ベース借りれなかつた。今日ライブなんだつて。で

も、代わりにおばあちゃんにこれを借りてきたよ。一本弦が足りないけど。」

「え？ ばあちゃんにつ、てお前」これ・・・

「準備できたわよ。さあみんな、私が最高にオシャレにしてあげるわ。」

数時間後、体育館特設ステージ裏。3人は緊張でふらふらになっていた。

「やべえよ、チョウちゃん。俺吐きそう。」

篤弘の顔面は今にも死にそうなほど真っ白になってしまっている。「思い出さずなつつの！ 何か違う事考えればいいんだって。ほら、久栄を見てみろよ。黙つてじつとしてる。実に落ち着いたもんだろ。」

「 頂太は必死に声の震えを抑えていた。久栄は壁に背を付けじっと俯いている。

「まじかよ。久栄すげえな。」

篤弘が近寄る。久栄をまじまじと見つめ、頂太に向き直る。

「気絶してるんですけど。」

「うおーい、まじかい！ ひさえー！」

「はい、ありがとうございました。GUT CLUBで「WILD MENTAL」でした。では、いよいよ最後の組です。ギター、ベース、ドラムの3ピースバンド、The Nerdoreの登場です。」

司会の声が終わるか終わらないかで急にライトが消えた。武史のいくい演出だ。円陣を組む。

「智さんたちの掛け声借りようぜ。行くぞ。来うー。」

「追う！..」

気合を入れステージに上がる。そしてライトが点灯した。他のバンドとは明らかに扱いの違う3人を皆羨望の眼差しで見ていく。わけではないようだった。

「えー！ 何あの80、いや70年代ロック調の衣装！..」

「髪型サイドバックだし！..」

「ギターとドラムと、ベー、え？あれベースじゃなくて三味線じゃん！！！」

思った通りの反応だ。だが何故か返つて3人は落ち着きを取り戻せた。これは想定の範囲内だ。司会者を見る。

「あ。え～っと・・では歌つていただきましょう。曲は「P.H.A.N TOM LIFE」です。」

しんと静まる場内。

皆がこちらに注目している。

まさにあのマンガのようだ。篤弘、久栄に合図を送る。

「あ～」

「あ～」

音はなく、一人の「一ラスが響く。そして頂太が英語の歌詞を口ずさむ。素晴らしいハーモニー。

そう、素晴らしいアカペラ。

「楽器使つてねえじやん。」

誰かのツッコミ。まるでそれが合図だったかのように篤弘のドラムがビートを刻み始めた。会場の空気が一瞬にして変わる。当然だ。セミプロ顔負けの連打なのだ。続いて久栄のギター。爽快感のあるメロディ、指使いは兄譲りのテクニックだ。頂太は必死に記憶を手繰り寄せる。マンガの中でベースを弾いているシーン、そして三味線の構造。頭の中で一つを融合させる。

最後に「ROCK」の名シーン。

(来た！)

完全にその世界に入り込んだ。迷うことなく三味線をかき鳴らす。3つの音が今完全に1つの音楽を作り出している。スタンンドマイクを引き寄せ腹の底から声を出す。ライトがさらに3人を浮き立てる。今ならどんなにめちゃくちゃな音程で歌つても完璧に仕上がるよつた、そんな錯覚さえ感じる。会場すべて、いやもっともつどここまで、地上のすべてが自分たちと一緒にしていく。いつまでもそうしていったいと思うほど気持ちのいい時間だった。

ふいに訪れた静寂がたつた3分間の無限、たつた3分間の永遠に終わりを告げる。場内は静まり返った。とても長く感じた。  
(もしかして、だめだつたか?)

耐え切れなくなつた。

「えつと、終わりです。」

その声を合図に皆が一斉に立ち上がり割れんばかりの拍手を3人に送つた。3人は安堵と喜びから、その場で抱き合つて笑つた。言うまでもなく、優勝の栄冠は彼ら、The Nerdreに送られた。

その日の夕方。

彼らはひつそりと解散を決定した。彼らはもう自分に迷いがない。助け合う必要はなくなつたのだ。そして彼らThe Nerdreは、穂智高にたつた一度だけ現れた伝説のバンドとして語り継がれることになつた。だがそれはまた別の話。

学園祭が終わり、後片付けを済ませ下校の時間になつた。頂太はクラスでも人気者になつていた。

(これで迫さんは振り向いてくれるはずだ。)

柚那が視界に入つた。心臓が大きく跳ねる。しかし、

(あれ? 楽しそうにしゃべつてるけど、相手は・・久栄!)

そのまま一人は笑顔で教室を出て行つた。後に一人が付き合い始めたと聞かされたときは本当に解散してよかつたと心から思った。そして、後に彼はこう語つた。

「あの時は初めて本気で殺意を覚えましたね。何のためのThe Nerdreだったんだろ?」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8570/>

---

The Nerdre

2010年10月8日14時45分発行